

神戸薬科大学における薬剤師を対象とした在宅医療研修プログラムの受講者調査及び学部学生を対象とした多職種連携1日見学実習の試み



1神戸薬科大学、2エナガの会

○鎌尾まや¹、國正淳一¹、高尾宜久¹、岩川精吾¹、小山 豊¹、北河修治¹、山本哲也²、中村治正²、宮田興子¹

背景・目的

薬剤師は他の医療職、介護職と連携して地域医療や在宅医療に貢献することが求められるようになり、薬学部においても地域・在宅医療や多職種連携に関する教育の重要性が増している。神戸薬科大学エクステンションセンターでは2012年度より、神戸市垂水区医師会（現在は地域包括ケアでの多職種連携を推進する特定非営利活動法人エナガの会）と連携し、多職種連携に重点をおいた「在宅医療を支援する指導薬剤師養成プログラム」を薬剤師向けに開講してきた（図1）。今回、修了者を対象としたアンケート調査を実施すると共に、本プログラムの一部を学部学生を対象として実施した。

図1. 「在宅医療を支援する指導薬剤師養成プログラム」の概要

生涯研修スキルアッププログラム

神戸薬科大学エクステンションセンターで実施している生涯研修のうち、在宅医療に関連する講座の受講



臨床能力育成プログラム

①医療・介護現場での研修

- ・医師の在宅療養患者宅への訪問同行
- ・居宅介護支援事業所、地域包括支援センターにおけるケアマネージャー業務に関する研修
- ・訪問看護師の在宅療養患者宅への訪問同行
- ・病院、介護老人保健施設等における、医師、看護師、リハビリテーション専門職、介護福祉士、支援相談員等の業務に関する研修

⇒レポートの作成

②多職種による症例検討会

↓
報告書の作成・報告会での発表

方法

2012年度から2017年度までの「在宅医療を支援する指導薬剤師養成プログラム」修了者24名を対象に、在宅医療に関する研修および医療・介護施設での実務研修について、郵送でのアンケート調査を実施した。また、2018年度に薬学部3、4年次生各1名がデイサービスセンター、5年次生1名が訪問看護ステーションでの多職種連携1日見学実習を受講した（図2）。受講生の実習レポートおよび報告会の発表内容より、本実習の効果と問題点について考察した。

図2. 学生を対象とした多職種連携1日見学実習の主な内容

デイサービスセンター



訪問看護ステーション



結果

1. 「在宅医療を支援する指導薬剤師養成プログラム」修了者に対するアンケート調査

回答者は10名、回収率は41.6%であった。回答者の年齢は50代が最も多く、在宅医療業務を担当しているのは9名、在宅医療経験年数が10年以上の者は4名であった（図3）。在宅医療業務の訪問件数は個人宅1~40件、施設1~3件と様々であった。無菌調剤への対応を行っている者は3名であった。

在宅医療に関連する講座の受講による生涯研修スキルアッププログラムについて、業務に役立ったかの調査では、「輸液調製（実習）」については1名が「あまり役立たなかった」と回答したが、その他の項目については全ての回答者が「役立った」「やや役立った」と回答した（表1）。各研修の必要性については「多職種連携（講義・演習）」について全員が「必要」と回答した（表2）。医療・介護施設での実務研修による臨床能力育成プログラムについて、業務に役立ったかの調査では、各研修先について大部分が「役立った」「やや役立った」と回答したが、「あまり役に立たなかった」と回答した者もいた（表3）。必要性については全員が「必要」「やや必要」と回答し、多職種連携を進める上で実務研修が極めて重要であると考えられた（表4）。研修日数については、「診療所・在宅訪問同行（医師）」や「訪問看護ステーション」は「短い」と回答した者が比較的多かった（表5）。

図3. 回答者の年代と在宅医療業務経験年数

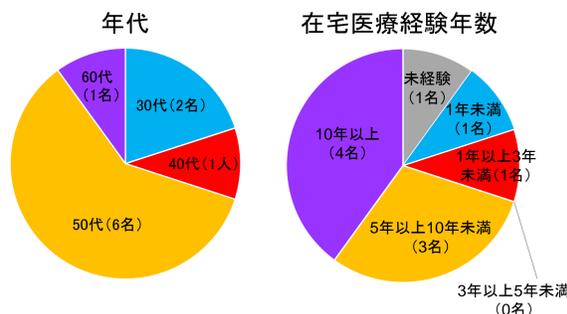


表2. 生涯研修スキルアッププログラムに対する評価（在宅医療に携わる薬剤師にとって必要か）

| 研修項目 | 必要(人) | やや必要(人) | やや不要(人) | 不要(人) |
|-------------------------------|-------|---------|---------|-------|
| 1.地域・在宅医療での薬局・薬剤師の役割（講義） | 7 | 3 | 0 | 0 |
| 2.介護保険制度・報告書作成等、在宅訪問の基礎知識（講義） | 9 | 1 | 0 | 0 |
| 3.多職種連携（講義・演習） | 10 | 0 | 0 | 0 |
| 4.患者心理・コミュニケーション（講義・演習） | 8 | 2 | 0 | 0 |
| 5.簡易懸濁法、粉碎等、高齢者に対する服薬の工夫（実習） | 9 | 1 | 0 | 0 |
| 6.パ・イザリン・フィジカルアセスメント（実習） | 8 | 2 | 0 | 0 |
| 7.輸液調製（実習） | 6 | 3 | 1 | 0 |

表4. 臨床能力育成プログラムに対する評価（在宅医療に携わる薬剤師にとって必要か）

| 研修先 | 必要(人) | やや必要(人) | やや不要(人) | 不要(人) |
|----------------------|-------|---------|---------|-------|
| 診療所・在宅訪問同行（医師） | 9 | 1 | 0 | 0 |
| 訪問看護ステーション | 9 | 1 | 0 | 0 |
| 居宅介護支援事業所・地域包括支援センター | 9 | 1 | 0 | 0 |
| 病院 | 8 | 2 | 0 | 0 |
| 老人保健施設 | 9 | 1 | 0 | 0 |

表1. 生涯研修スキルアッププログラムに対する評価（業務に役立ったか）

| 研修項目 | 役立った(人) | やや役立った(人) | あまり役立たなかった(人) | 役立たなかった(人) |
|-------------------------------|---------|-----------|---------------|------------|
| 1.地域・在宅医療での薬局・薬剤師の役割（講義） | 5 | 5 | 0 | 0 |
| 2.介護保険制度・報告書作成等、在宅訪問の基礎知識（講義） | 5 | 5 | 0 | 0 |
| 3.多職種連携（講義・演習） | 8 | 2 | 0 | 0 |
| 4.患者心理・コミュニケーション（講義・演習） | 4 | 4 | 0 | 0 |
| 5.簡易懸濁法、粉碎等、高齢者に対する服薬の工夫（実習） | 6 | 3 | 0 | 0 |
| 6.パ・イザリン・フィジカルアセスメント（実習） | 8 | 2 | 0 | 0 |
| 7.輸液調製（実習） | 5 | 4 | 1 | 0 |

表3. 臨床能力育成プログラムに対する評価（業務に役立ったか）

| 研修先 | 役立った(人) | やや役立った(人) | あまり役立たなかった(人) | 役立たなかった(人) |
|----------------------|---------|-----------|---------------|------------|
| 診療所・在宅訪問同行（医師） | 7 | 2 | 1 | 0 |
| 訪問看護ステーション | 7 | 2 | 1 | 0 |
| 居宅介護支援事業所・地域包括支援センター | 7 | 2 | 1 | 0 |
| 病院 | 7 | 1 | 2 | 0 |
| 老人保健施設 | 7 | 1 | 2 | 0 |

表5. 臨床能力育成プログラムに対する評価（研修日数は適当か）

| 研修先 | 研修日数(日) | 長い(人) | 適当(人) | 短い(人) |
|----------------------|---------|-------|-------|-------|
| 診療所・在宅訪問同行（医師） | 0.5 | 0 | 6 | 4 |
| 訪問看護ステーション | 0.5 | 0 | 6 | 4 |
| 居宅介護支援事業所・地域包括支援センター | 1 | 1 | 9 | 0 |
| 病院 | 1 | 1 | 8 | 1 |
| 老人保健施設 | 1 | 2 | 7 | 1 |

2. 薬学生を対象とした多職種連携1日見学実習の効果と問題点

学生対象の1日見学実習受講者のレポートや報告会での発表より、他の医療職、介護職の職域や視点を理解する効果が感じられた（図4）。一方で、3年次生では薬剤師業務に関する知識が不足していることから、事前学習の必要性が示唆された。

図4. 学生のレポートへの記載内容（抜粋）

実習で学んだこと

- ・利用者の言っていることを否定しない（3年生）
- ・利用者の背景を知ってサポートしていくことが大切（4年生）
- ・多職種連携における、薬剤師以外の視点（5年生）
- ・「一包化」「かかりつけ薬剤師」「薬剤師居宅療養管理指導」などについて、患者や家族が知らない場合があること（5年生）

地域医療、多職種連携について考えたこと

- ・医療機関、福祉施設、利用者とその家族の間での情報共有が重要（3年生）
- ・介護は「システム化されたもの」といったイメージがあったが、介護福祉士は個人に合わせたサポートをしていた（4年生）
- ・他職種の仕事を知ることによって薬剤師職能をより有効に発揮できる（5年生）

今後の薬剤師の役割やそのために必要なこと

- ・患者の健康管理全般を担う必要がある（3年生）
- ・根気強さとコミュニケーション力（4年生）
- ・投薬時だけでなく、その後の経過観察が必要（5年生）
- ・積極的に患者や他職種に関わる姿勢（5年生）
- ・薬剤師は患者さんのためにできることを考え、薬以外のことにも積極的に関わる必要がある（5年生）

考察

以上より、薬剤師を対象とした在宅医療を支援する指導薬剤師養成プログラムでは多職種連携に関する研修や医療・介護施設での実務研修の必要性が示された。研修内容や実務研修の日数等については、個々のニーズに応じた柔軟なプログラムとすることが望ましいと思われる。また、学生を対象とした1日見学実習についても、他の医療職、介護職の職域や視点を理解する上で効果的であると判断された。一方で、低学年については事前学習の必要性が示唆された。